



ここ先に「銀源寺間歩」があり、公開されている約270mを通り抜けられます。

文2年、大内義興の跡を繼ぎた義

やじめているが海上の船から光り輝く仙の山を見て、船頭からかつてその山から多くの銀がとれていたと聞き、技術者を連れて山に入り、銀山を見発したという説です。

いずれによせ寿徳の功績が大きのは確かで、寿徳が朝鮮半島との交易を通じて「灰吹法」という精錬技術を導入したことにより、石見銀山の産出量は飛躍的に増大。後に灰吹法は国内各地の銅山に伝わって銅山技術の礎となります。

石見銀山をめぐって戦乱が相次ぐようになったのもこのころからです。当時、博多を支配下に置き、朝鮮や明との交易に力を入れていた大内義興と寿徳は関係が深く、義興は1528(天文5)年に銀山の西南に矢滝城を築き、銀山を押さえます。1531(享禄4)年、その城は豪族の小笠原長隆によって攻め落とされますが、1533(天文2)年、大内義興の跡を繼ぎた義

明治維新後は1873(明治6)年に旧松山藩家老が再建に着手し、その後も大阪藤田組などによって経営が継続されました。が、1923(大正12)年、經營不振で休山。1942(昭和17)年、銅探査が試みられたものの水害により閉鎖。そ

銀山で亡くなった人々の供養に25年の歳月をかけて1766(明和3)年に完成した「石窟五百羅漢」。それぞれ異なる表情をした500体の羅漢像が安置されています。



徳川幕府が銀山支配の拠点とした「大森官所」跡。  
現在は「石見銀山資料館」



銀山で亡くなった人々の供養に25年の歳月をかけて1766(明和3)年に完成した「石窟五百羅漢」。それぞれ異なる表情をした500体の羅漢像が安置されています。

## より道紀行

# 石見銀山への旅

2007年7月、島根県の「石見銀山遺跡とその文化的景観」が、ユネスコの「世界遺産」に登録されました。

世界遺産への登録は、国内で14件目。

注目が高まっている島根県大田市大森町、石見銀山遺跡を旅しました。

■ザビエル来日は銀とかかわっていた?

銀生産の拠点だった「銀山地区」の2つの地区からなる町です。

堂ふるな構えの商家、武家屋敷、格子戸や濡れ縁のある町家。街道に面して赤い石州瓦の古い家々が軒を連ねる町並み地区は、早く

り、国道375号を南へ、中国山地

の山腹に近づき始めたころ、「フランシスコ・ザビエルが日本に来たのは、銀が関係していた」という説がある

らしいですね。何しろ当時の世界地図にも石見銀山は載っているんですから」と、タクシー運転手さんが

思いも寄らない話を投げかけてきました。

ザビエルと石見銀山? その取

りあわせがすぐにはピンと来なかつたものの、ザビエルが鹿児島に来航後、京都に上つて戦で荒れた都に失望するや、当時、日明貿易を独占し西日本の勢力を誇っていた山口の大内義隆、大分の大友義鎮(宗

麟)を訪ねたことを思い出しました。

山あいの小さな町が、時空を越え

て日本と世界を結ぶタイムトンネルになつている気がして旅的好奇心がくすぐられる始めたころ、車は銀山のある「仙の山」の麓、大森町に到着しました。

## 文●網野ゆかり

代官所の役人宅や町屋が軒を連ねる町並み地区。群言堂の活動に共鳴して移住してきたアーチストの工房や店舗も近年増えています。



石見銀山銅約4万8千石の  
政治・経済の中心として栄えた町並み地区。



して翌年、石見銀山はついに400年歴史に幕を下ろしたのでした。

しかし、大内氏の支配は安定せず、1537(天文6)年、出雲を擁

点とする尼子晴久が銀山を手中に収めます。2年後、大内義隆が再び銀山を奪回。1540(天文9)

年、小笠原氏がまた銀山を奪い、以後約20年にわたって銀山を領有します。

そして大内義隆が重臣の陶晴賢に討たれたのを機に毛利元就が台頭

するなど、毛利氏と尼子氏による争奪戦が繰り広げられ、1562(永禄5)年、毛利氏が所有権を得ます。

江戸時代を迎えると、石見銀山は徳川幕府の直轄地となります。

銀山経営に長けた大久保長安が

初代奉行となると銀の増産が進み、慶長から寛永年間にかけて最盛期を迎えます。このころ日本の銀産出量は世界全体の3分の1を占め、しかも日本の5分の1が石見銀山だつたといいます。それほど潤沢だった産出量もやがて徐々に減り始め、17世紀前半には石見銀山の大半が休山します。

明治維新後は1873(明治6)年、旧松山藩家老が再建に着手し、その後も大阪藤田組などによって経営が継続されました。が、1923(大正12)年、經營不振で休山。1942(昭和17)年、銅探査が試みられたものの水害により閉鎖。そ

易は「体となつて進められました。

このボルトガル船の貿易は、明で安く買った生糸を価格の高い日本へ持ち込んで銀と交換し、その銀で明やアジアで紡織物、陶磁器、香辛料を購入し、母国へ持ち帰るとい

かせないのが、外國とのかかわりです。1533(天文2)年ごろから日本は朝鮮へ大量に輸出され、1

540(天文9)年ごろからは東アジアや明へも大量に輸出されたと

いう記録があります。当時ヨーロッパは大航海時代を迎えて、「東方見聞録」で「黄金の国ジバグ」への憧

れが募っていた中、日本の銀の噂が伝わるのに時間はかかるなつたに違いありません。

実際、中國船が種子島に漂着、同乗していたボルトガル人が日本に

移り、明へもたらしたのは、石見銀山鐵砲をもたらしたのは、石見銀山をめぐって有力守護大名らが争奪戦を繰り広げていた1543(天文12)年のこと。漂着も実は日本

の銀の目的で、偶然ではなかったまま

いう説があります。大内氏は日本に生れ、キリスト教布教のためボルトガル王国によってアジアに派遣された

宣教師ザビエル。彼は来日3年後の神父へ送った書簡で、「スペイン人は日本のことを銀の島と呼んでいる」

とつづっています。また、ザビエルは布教を保護した大名の港には貿易船を優先的に入船させ、布教と貿



銀山地区



石窟五百羅漢窟に隣接する女性部族「群言堂」本店。古民家を再生し、中はモダンな空間が広がっています。

